

書くように話すに如くはなし

牛村 圭

語り下ろし流行のうらで

手にとつて広げた新聞の広告欄を見れば、書店に足を運べば、インタビュー記録を活字に起こしてできあがったらしい書物が目に留まる。取材を受けた側が校正作業に加わることもあるが、大概は著名人ゆえの多忙を理由に出版社任せで活字となっているのだろう。書き下ろしならぬ語り下ろしである。この種の書物は、内容はともかく、たしかに読みやすく、分かりやすい。語りを素材とし、さらに編集者が工夫をこらしているはずだから、当然のことだろう。情報が氾濫し、必要な知恵や知識を手軽に得たいと思う者には、おあつらえ向きの書籍群には成り得ている。向後、この手の語り下ろし本がますます隆盛を極めるのは、想像に難くない。

語り下ろし本であっても、本は読まないより読むに限る。だが案じられることがある。と言つても本の中味ではない。語り下ろしの流行を望ましいものと見なし、話すように書くことを勧める動きが出てくること

を憂慮する。堅い語彙は用いず、凝った修辞などにこだわらず、平易な文体を用いて、書け、これこそ伝えたいことを読み手に届けるための文章作法の基本である、という指導を危惧する。

一般論としては、伝えたい内容が同じならば、分かりやすいに越したことはない。大学の教授会で、ごく当たり前のことをわざと難解に滔々と語り、散会時刻を遅延させる同僚に辟易した経験がある方ならば、首肯いただけよう。こういうモノローグ・プロフェッサーは、放つておいてよい。一方、真摯に対処する必要を感じさせるのは、語りに見られる分かりやすさを、文章を記すさいの分かりやすさの規範とせよ、という主張である。もの書きを自認するなら周知のように、書くことと話すことは別種であり、語りを規範として文章を練れ、という勧めは、的を射ていない。話すように書くことが分かりやすい文章を書くさいの心得だとの前提で、文章作法の指導が行われるならば、それは大いなる誤りである、と思わざるを得ない。

達意の文章を修得するには、時間をかけた訓練を要する。実作に励まなければならぬ。話すことを研究してみても、さして効果はあがらない。その一方、別種のものとは言え、書くことが語りによりき影響をもたらすことはあると思っている。書くことを身につけてこそ、語りの才も進化する、つまり文章を磨けば、話術も高まると信じている。

また、文章を磨くことから得られる効用は、発した言葉を介して教育にあたる教師こそ、熟考してみる価値があるだろう。児童は、そして生徒は、「先生」が口にした言葉を通して授業を受け、学ぶ。発せられる言葉の重みは、指摘するまでもない。本誌読者には多数の教育関係者がいると仄聞するなか、以下臆面もなく私見を記させていただくこととする。読者諸賢のご寛恕を冀う。

書けなければうまくは話せない

「書くことを身につけてこそ、語りの才も進化する」とは書いたものの、書くように話すことは難しい。そしてそれは、功成り名遂げたもの書きでも感じていることらしい。

もう四半世紀以上前のこと、大学院時代指導教官だった二人の師から、別々の機会にお話をうかがうことがあった。偶然ながら、それぞれの師の話は「あの人は頭がとていい、講演が、対談が、そのまま活字となる」ということに移り、これまたまったくの偶然ながら、お二人ともその「頭がとていい人」の例として、評論家の江藤淳と美術史家の高階秀爾の名を挙げられた。聴いていたこちらは、話の内容の一致に驚いた。当時、師はお二人とも五十代後半、ともに格調高い文体による豊かな研究業績を持つのみならず、講演ともなると聴く者を引き付けてやまない話をなさることで知られていた。そういう文章と語り双方の名人が、期せずして揃って江藤淳、高階秀爾両氏に言及されたのだった。

「講演が、対談が、そのまま活字となる」のは難事ということから、おそらく次のことを導いてもよいのだろう。対談や講演の語りには論旨の飛躍や表現の無駄が多く、誌面掲載のさいには十分な推敲を要する、それに比して、書かれた文章は練られたものであるのが当然だ、ということの二点である。座談、講演の名人である二人の師にしても、書くように語ることを難しいと考えているのだと知った。

ところで、書くのは苦手だが話すことなら何とか・・・という大人は少なくない。だが、試みに思い起すがよい、披露宴などの祝いの席で耳にするスピーチの数々を。まとまりを欠き、いつ終わるのかも分からぬスピーチ、唐突に先人の名句を持ち出して終わるスピーチ、この種のを延々と聞かされていると、い

つしか披露宴が疲労宴に変わる。スピーチの主は、文章を書くことが苦手に違いない、あるいは書くことを甘く見ているな、とその都度思う。

発言を前もって依頼されているのなら、草稿を作り、推敲を重ね、練られた文章に仕上げてそれを暗記して臨めばよい。それが礼儀だろう。聴く者を魅了するようなスピーチができれば、そういう話者を選んだ新郎なり新婦の株も上がるだろうに、とも思う。祝宴ゆえ話してくれば何でも可、というものではない。書けなくても話せる、という思いこみが招く悲劇の一例をここに見てとることができる。

文章をどう練るかーささやかな提言

文章を書けてはじめて話術も高まると主張するのであれば、まずは自らの文章作法に言及するのが筋だろう。いまなお外国語はもとより日本語も発達途上にある身だが、本稿での私見を分かっていたくためには、拙いながらもわが文章作法を紹介するのが責務なのかもしれない。浅学を顧みずここに提言を綴ることをお許しいただきたい。

文章には「流れ」が大切である。水が高所から低所にむけて進むように、無理なく、自然に、叙述が進行するのが望ましい。読み手は、その流れに沿って活字を追っていけば、書き手の世界へと入り込める。そういう文章を生み出すためには、まず「流れ」を妨げない工夫を考えたい。

・センテンスとセンテンスをつなぐ表現（広義の接続語）を多用しなくとも、その接続関係が分かるように

して書く。

広義の接続語が必要ということとは、それを取り除くとセンテンスとセンテンスのつながり具合が分かりにくいことを証していることに他ならない。つまり、論旨がうまく展開していない、達意の文ではない、ことになる。前文の理由説明と分かるようにして後続のセンテンスを書くことができれば、わざわざ「その理由はと言えば」などと文頭に記さずにすむ。

また、よく用いてしまう表現に「このように」「や」「そのように」がある。これも、論旨のつながりが上手くいっているか不安ゆえに書いてしまう広義の接続語だろう。推敲にあたり「このように」「や」「そのように」を取り去ってみるとよい。なくても前後の意味が自然に通じるのなら、不要だったということ。また、文頭に大仰な表現を用いることなく、すつと入っていけるようなセンテンスを目指すように努める。過剰な髪飾りは取るのがよい。

・ひとつひとつのセンテンスの長さを調整して、文章全体がリズムを生むように努める。

長めのセンテンスを複数回続けて使って論じたならば、その直後に短めのセンテンスを入れて主張を記すと、引き締まり、効果的に主張が伝わる。また、意識して二―三つの短文を連続させるならば、軽やかなリズムが生まれる。

加えて、やや細かいことながら、次の諸点を挙げたい。

・同一表現を周辺で繰り返さない。

同一表現の反復は、単調さを招く主因である。名詞に限らず、動詞や形容詞等も、同じ内容をもつ、異なる表現を考えて使う。たとえば「反復」と記したら次は「繰り返し」とする、のようだ。もっとも、意図的に同じ表現をしつこいくらいに反復することで、主張が強まる、という利点も時にはあるのだが。

・熟さない語彙、不要な外来語を用いない。

「正反対」の語があるのに、「真逆」とは書かない。あるいは、「最終版を作成する」が妥当なところだ、「ファイナライズする」などと記さない。ちなみに、英語であっても、*finalize* などの、正統派の英語話者は言わない。*finalize*, *complete*, *terminate* 等々、熟した候補はいくつもある。

・文末に工夫を施す。

たとえば「のである」の過度の反復は単調さにつながる。しかも「のである」と繰り返すと、文章全体が重々しい雰囲気になり込んでしまう。日によって履く靴を変えてみるかのように、文末もあれこれ工夫したい。とは言え、学術論文では「のである」が正統な書き方、というふうに考えているのなら話は別だが。

書くように話すために

前節に記したような文章作法もどきに加え、語りのさいには次のようなことに留意すると、話術の向上が期待できると考えている。同様に、箇条書きふうで紹介することとする。

- ・一つのセンテンスを短く話す。

話し慣れないうちは、「……で」「……だから」といつぶつに語り続けて、一向に句点が現れないセンテンスを口にしてしまいがちである。話している当人の混乱は自己の責任ということとしても、聴き手にとって分かりにくいこと、この上ない。

また、短いセンテンスで話しているようでも、聴いている側からすると、かなり長いということが往々にしてある。「一分話します」と言って一分話しているつもりでも、二〜三分話すの方が多し。それと同様に、センテンスの長さは自分では気づきにくい。自己の語りに句点を付すタイミングを見計らいながら話すことが肝要だろう。

- ・逆接でもない場で逆接の接続語を用いない。

前項と関連することを一点。逆接でもないのに「……が」と言って、センテンスを長くするのは控える。また、TVの民放のアナウンサーや記者に多い「……なんですけれども」「けれども」「……」を繰り返して、センテンスをつなげていくのも、練れてはいない話術の典型だろう。

- ・理由でもないのに「わけ」を多用しない。
「……というわけです」「……あるいは」「……なわけですから」「……」とつづつ、理由を述べているのでもない場面で「わけ」を口にするのは控えるのがよい。

- ・発話直後の耳障りな語句は口にしなないように努める。

不要に繰り返される「わけ」も十分耳障りだが、とりわけ、発話直後に置かれた表現は、聞いていて愉快ではない。話し始めの「えー」「や」「えー」と「あー」「あー」、あるいは「やっぱり」「ほんとに」「なんか」などは意識して使わないように努める。「なんか」で始まる発言は、軽薄にさえ聞こえる。要は、頭のなかでの推敲作業を施してから、音声として出すという心づもりを持つことである。

「えー」「や」「あー」を第一声として口にしなないと調子が出ず、話せない、というのであれば原稿を作り、それを暗誦してしまうのが、この悪癖を克服するための一番の近道であろう。

- ・味気ない安易な表現に依拠しない。

動詞をすべて「やる」「する」等の何にでも使えるような類とすることは控える。日本語話者の矜恃をもって、さまざまな表現を考え、それを口にしてみたい。動詞に限らず、名詞も「やつ」で代用するよつなことは避ける。「先週教えてもらったやつをやりました」などと報告に来る学生がよくいるが、

聞いていてその工夫のない表現にがっかりする。「やつ」と「やる」で、まさか頭韻を狙っているのではなかるうが。「やつ」ではなく「問題集」「やる」のではなく「解く」という具合にして「先週教わった問題集を解きました」とはなぜ言えないのか。語彙を吟味して話せば、味気ない表現が、豊かな日本語の発話へと転じる。

書くように話すという本義からやや離れるが、最後に、聴き手への広義のマナーとも形容できることを、選良たちの発言を引きつつ二点掲げておきたい。

・明らかに間違った日本語を使わないように努める。

国会中継を見ていると、「おきほど総理がおっしゃられたように」と口にする議員が多い。だが「おっしゃられる」は誤用である。「おっしゃる」だけで十分ということを理解していないらしい。

話を向けられた総理の方も、「日本人の命（を守る責務は）、すべからく国の最高責任者である私にある」（平成二十七年二月四日）と答弁するが、「すべからく」を誤解している。「すべからく」は「すべて」「総じて」の意ではない。漢文で習う再読文字「須」の「すべからく」「べし」の「すべからく」であり、「当然……する必要がある」の意をもつ。「すべからく」を用いるときは、必ず「べし」で受ける。重責を担う政治家には、言語担当のブレンはいないのだろうか。

なお、昭和末年に登場した「違くて」「や」「違かったら」といった誤用（「違つ」を形容詞と解しての誤った活用形）が近頃あまり見られなくなったのは、慶賀すべきことだろう。

・聴き手の理解の妨げともなる口癖は、常に意識して直すように心がける。

三一一の大震災ののち、連日、何度もＴＶで会見が放映された当時の内閣官房長官の口癖は、「まさに」だった。そして、部下の「まさに」の連発に感化されたのか、時の総理まで任期終盤には「まさに」を多用するようになったのは、聞いていて可笑しかった。なお、「まさに」は、党派をこえて現総理の口癖でもある。

まとめる意図などないにもかかわらず「要するに」を連発したり、今後のことを何かと対比しているのでもないときに「さし当たって」を使ったり、というのも再考してみるとよい。不要な「とりあえず」もよく耳にする。英語を話すとき、anywayの反復が品を欠くと同じだろう。

昨今では、インタヴューを受けたアスリートや芸能人が、まず「そうですね」と言ってから話し出す場面を多く見かける。この「そうですね」も、ないに越したことはない。もっとも、大相撲の力士の「そうですね」は、職業語として残しておきたいと思うが。

スピーキングとは紙に書かないライティング

本稿では、日本語を書き、そして話すことを念頭に叙述を進めてきたのだが、外国語（具体的には英語）の事例にも触れてみたい。

日本人の英語学習者は、読み書きはできるが、聴く・話すは苦手だ、と言われてきた。しかし、昭和末年の「国際化」以降、英会話学習にいそむ人口は増し、近年では、中等教育の場で日本語を使わない英語の授業が行なわれるようになり、リスニングやスピーキングの能力は、前世紀より向上したことである。

「実用英語」礼賛の風潮のなか、幕末以来の伝統的な学習手段である訳読が廃れてきていると嘆く大学の英語教師は少なくない。私も憂いを同じくする。訳読を通して、日本語を磨くことができるためでもある。このほかに気になるのは、英語を「書く」ことの重要性を指摘する声をあまり聞かないことである。

「実用英語」には、電子メールを介して英語でコミュニケーションをとることも含まれるだろう。そのさい要求されるのは英作文力のはずなのに、「実用英語」といえばリスニングとスピーキングのこと、という了解が今なお根強い。しかし、日本人の英作文力は決して高くはない。「実用」に耐えるのか、と思う。英語を「書く」という行為を、軽視してよいのか。ここで一寸視点を変えて、外国語としての日本語学習者の様子に触れてみたい。

海外の大学で日本語を教えたさい、以下の発見をした。幼少期に父親の勤務等で滞日経験を有する学生には、日常会話ならあまり問題ない者が多い。そして、観光ガイドレベルならば、その会話力でさほど支障なくこなしていけそうだった。しかし、作文を書かせてみると、向上が期待できないような日本語と判明し、驚いた。話せるが書けない、のだった。一方、書物や映像でしか日本を知らず、日本語学習を基礎から着実に進めてきた学生のなかに、修辞を効かせた文章を綴れる者がいる。会話にぎこちなさはあるが、作文は立派だった。場数を踏めば、会話は流暢さを獲得するだろうと思わせた。

同じことが、外国語としての英語を学ぶ日本人学習者にも当てはまるだろう。「実用英語」でのスピーキングの重要性を説くならば、まず英作文より始めるのがよい。英語を「話す」ことは、英語を「書く」と表裏一体であり、スピーキングとは、紙に記さないライティングと形容できる。ライティング能力の向上は、スピーキングの向上に寄与する。語りを高めるためにはまず文章を磨け、ということとは、外国語学習の場でも言えるのである。

教師の権威を高めるために

誤字・脱字が多く、また混乱な文章を書くことは、教師の基本的な能力をもっとも疑わせるようになるものです。例えば、話すことがあまりうまくなくても、あがってしまったのだろうとか、話すことは好きじゃないんだとかで済むことがあっても、紙の上に書くことは、(あがるはずもなく推敲もできるはずなのだから)まったくもってその人の能力そのものという評価を受けるものです。

本誌『玲』主宰の宗内教授の『教師の権威と指導力』(彩光文庫、二〇一一)は、教師の指導力に不可欠な「権威」を、「専門性」「人格性」「関係性」そして「統制性」の四点から詳説する。そのうち、「親・保護者の信頼から得られる権威」として、親や保護者との関係性を築く大切さを述べている。一読者として叙述に目を通すと、四十数年経て今なお記憶に残る昔日の師たちが、なにゆえに良き師だったのかが納得でき

る。指導力を持ったあの先生たちには、こういう「権威」がたしかにあった、と思いつつページを繰ることが出来る一書である。

右の一節は、その『教師の権威と指導力』から引いた。「親・保護者との関係性を築く」ために取り組む活動の一つとして、学級担任の家庭向け広報である「学級だより」を取りあげ、文章への配慮を留意点の最初に掲げる。直ちに首肯できる助言だが、「混迷な文章」をどうすれば克服できるのかについて、宗内教授の具体的助言はない。本書を丹念に読んでみても、文章修行への手引きは見当たらない。著者が老練なもので書きであると存じ上げているがゆえに、無い物ねだりの気持ちは強くなる。願わくは、教師向けに「平明な文章を書く心得」を付したこの書の改訂版を出してくださいださらないだろうか、と勝手な希望を記させていた

く。
教員になるためには教科教育法以下の専門科目を履修し、教育実習をこなす、教員採用試験を通過しなければならぬ。採用後も、研究授業等を通して、授業の進め方などについて先輩教員の指導を受ける。もちろん、学級経営や進路指導、部活動顧問等の校務もあり、多事な毎日が続く。爾後定年を迎えるまでの三十二年間そういう日々をおくることになるが、教育の場での「道具」である言葉を練り、磨くことに重きを置く研修や研鑽の機会はあるのだろうか。教師の質を高めるためには、教員免許の更新といった制度の変更ではなく、授業を遂行するさいの道具である言葉のためめ研鑽を課するような仕組みの構築があってもよいと考えている。

学校公開という名の授業参観に向き教師たちの日本語を耳にし、印刷物や「模範解答」に記された日本語に目を通すと、就職後も母語の研鑽を積むことが急務ではないか、と感じることが多い。例えば、中学二年生の国語で配付された「模範解答」にはこういう記述があった――「このように、鯉節は日本人が世界に誇れる食べ物だ。うまみ調味料に取って変わってきてるが、『食の世界遺産』ともいうべき鯉節を伝承するのは、私たちの使命である」。

和食を支えてきた鯉節が衰退している現状を述べた文章を読み、要約せよという問題への「模範解答」の最後の箇所から引いた。冒頭の「このように」には、ここでは目をつぶる。文章体ゆえ「きてるが」ではなく「きているが」としたいし、「取ってかわる」は「変化」ではなく「交代」なのだから、「代わる」がよい。だが一番の問題は、「うまみ調味料に取って変わってきてる」の部分だろう。「うまみ調味料に取って代わられている」あるいは、「うまみ調味料が鯉節に取って代わってきている」としなければ、本文の内容と正反対になる。国語科教員の作品ということを考え合わせると、虚しい気が増す「模範解答」に思えた。

初等中等教育の教室に集う児童や生徒は、「先生」が口にした言葉を通して授業を受け、学ぶ。教員は、日本語話者の先輩としても児童や生徒に接していることになる。書かれた文章を通して、あるいは口頭で、発せられた教師の言葉遣いは、良くも悪くも感化を及ぼす。次世代の教育を担う者には、日本語話者の矜持をもち、自らの日本語を磨き、授業に臨んでもらいたいと切に願う。母語の研鑽に励むことは、教師の権威を高め、指導力を確たるものにする重要な手段でもある。